

## 論文概要の和文様式

雑誌におけるタイトル: 妊婦のビタミンD不足とアレルギー症状 エコチル調査追加調査より

和文タイトル: 妊婦のビタミンD不足とアレルギー症状 エコチル調査追加調査より

ユニットセンター(UC)等名: 京都UC

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: BabLab紀要

年: 2019 月: 12 巻: 3 頁: 20-22

筆頭著者名: 金谷久美子

所属UC名: 京都UC

目的:

現代人は屋外で過ごすことが極端に少なくなった。紫外線により皮膚で合成されるビタミンDは、骨関連だけでなく、他にも様々な働きがあることが知られるようになってきている。そこで、妊婦において紫外線にあたる頻度や血中ビタミンDの充足状況について、さらにビタミンD不足とアレルギー症状との関連を調べた。

方法:

エコチル調査追加調査保存血清のうち、2012年1,4,7,11月に採血分について、血中25(OH)D濃度を測定した。追加調査で得られた紫外線にあたる頻度に関する回答等や、エコチル調査で得られた食事からのビタミンD摂取量やその他の背景因子と血中25(OH)D濃度を照合し、関連を探った。さらに、妊婦の日々のアレルギー様症状の回答とも照合し、ビタミンD不足とアレルギー症状との関連を探った。

結果:

血中25(OH)D濃度は、約7割の妊婦で骨代謝の観点から「不足」とされる20ng/mLを下回っていた。明瞭な季節変動があり、冬・春には9割の方で、夏・秋で5割の方が「不足」であった。ビタミンD不足妊婦(<20ng/mL)では、不足していない妊婦に比べてアレルギー症状を発現するリスクが高かった。

考察:(研究の限界を含める)

多くの妊婦でビタミンDが不足している状況が明らかになった。特に日光のもとに出る機会が少ない妊婦で不足は深刻であり、冬季は9割の方で不足ラインを下回っていた。また、ビタミンD不足が妊婦のアレルギー様症状の発現リスク因子になっていること、ビタミンD不足群では黄砂時・花粉時のアレルギー症状発現リスクが高いことも示された。研究の限界:因果の逆転;アレルギー症状の強い方が家にこもりがちになり結果としてビタミンD濃度が下がった可能性がある、誤分類の可能性;紫外線にあたる頻度や食事内容については、妊婦の自己申告によるものである。

結論:

多くの妊婦でビタミンDが不足している状況が明らかになった。特に日光のもとに出る機会が少ない妊婦で不足は深刻であった。また、ビタミンD不足が妊婦のアレルギー様症状の発現リスク因子になっていること、ビタミンD不足群では黄砂時・花粉時のアレルギー症状発現リスクが高いことも示された。